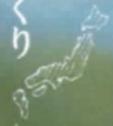


産地紹介

日本のものづくり



紡がれる 尾州の技

悠々とした木曾川や長良川、揖斐川の流れを抱く濃尾平野。ここに位置する「尾州」は、その豊かな自然の恵みを背景に、古く奈良時代から絹や綿、麻を育て、織物にしてきたと伝えられています。やがて明治期になると、その技の蓄積が毛織物にも生かされるようになり、昭和以降、尾州は高級ニットや織物の産地として世界にその名を知られるようになりました。天然繊維の特性を知り尽くしていること、そして紡績、撚糸、糸染め、製織、後染め整理加工といった一連の工程がすべて地域内で行えることが、尾州の強み。

針抜き和柄ジャガード カットソー 鞞草(うつぼぐさ)

古布をつぎはぎしたようなジャガードも、ここ尾州生まれ。ところどころ針を抜いて編地の裏に糸を浮かせる、「針抜き」という技法で手間ひまかけて編み上げた生地は、ふわりと軽く味わい豊か。



「人間の髪がひとりひとり違うように、ウールも季節ごと、個体ごとに少しずつ違っていきます。そこが化学繊維と違うところ。私たちはそんなデリケートな天然繊維を、織りや編み加工のちよつとしたさじ加減でコントロールする。機械任せにできないことだらけな、職人技の世界なんです」。現場で聞いたそんな声から、産地の確かな誇りが伝わってきました。90年代以降、尾州でも工場の数はずいぶん減ったといいますが、それでも今なお、「日本に尾州あり」の志を掲げる作り手たちが、技を競い合っています。そして尾州ならではの豊かな表現力を求め、欧米のファッションブランドからもオーダーが舞い込んでいるとか。「ものづくりの楽しさ醍醐味を、次世代にも伝えてきたいんです」。そう語る人々の目は、生き生きと力強く輝いていました。

